

将棋の用語—気づかない位相語とその用法の成立—

勝 田 耕 起

はじめに

本稿は、現代における位相語彙研究の一つとして将棋の用語について検討を試みるものである。将棋用語といえば「王手」「成り金」といったものが比喩的に一般語彙化したものとして認知されているが⁽¹⁾、今回対象とするのはそういった将棋特有のルールに基づく事柄を言い表した専用語ではなく、“普通の”言葉で指し手の解説をしようとした部分の語法である。例えば、

01 ▲5六同歩は、△同飛なら▲5五歩△7六飛▲7七銀△7四飛▲5七金から飛車をいじめて先手面白いが、△8八角成▲同玉△5六飛が少し嫌みだ。(『豊島将之の定跡研究』p.20)

という例の「いじめる」「面白い」などは共通語と形が同じで意味も想像しやすい。これらはプロ棋士にも用語として自覚されているもののようで、専門の事典にも、

いじめる：価値の低い駒で価値の高い駒を攻め立てること。「銀で飛車をいじめる」などと言う。(『日本将棋用語事典』原田泰夫監修、2004年)

おもしろい：やや指しやすい状態をいうことが多い。▼研究、検討する価値や可能性がある局面をいうこともある。(『読む将棋百科』羽生善治著、2009年)

と項目を立てて記述してある。このような、一般語彙が将棋解説用語になったものとしては他に、

挨拶、謝る、味(がいい／悪い)、忙しい、うるさい、キズ、催促、しびれる、楽しみ、手厚い、手抜き、控える

といったものがあり、いずれも『日本将棋用語事典』に掲載されている。そして典型的な将棋用語、すなわち将棋起源で、将棋でしか用いられないような用語も当然存在するので、そういうものも含めて「将棋用語」として公的に認知されているものを分類してみると次の表のようになろう。

【表】将棋用語の分類

発 生	発生後の変化	語 例
もともと将棋用語	一般語彙化しない	質駒、即詰み
	一般語彙化した	王手、成り金
もともと一般語	意味変化あり	面白い、勝ちやすい
	意味変化なし	催促、楽しみ

さて本稿で問題にするのは、上記用語事典に載っていないものである。これは将棋用語だと思われていないか、成立の新しいものと考えられる。具体例としては用例文 01 の「嫌み」がこれに該当する。

1. 研究方法と資料

日本語学の分野では「気づかない方言」という概念があり、全国で該当語が報告され、分析の蓄積がある⁽²⁾。そして近年では、「数学における動詞「従う」の意味・用法—「気づかない」専門日本語語彙の研究に向けて—」（佐藤宏孝・花蘭悟、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』35号、2009年）のような専門用語に目を向けるものもある。これは従来からある専門用語研究に日本語学や日本語教育の視点をクロスさせたもので、例えば細井勉は1988年時点で『日本語百科大事典』（大修館書店）に「数学の方言(1)～(3)」として、垂線を下ろす、方程式を立てる、といった表現を紹介している。

着想としては本稿もそういう流れに位置づけられるものだが、将棋という“ゲーム”の用語である点、これまでの位相語彙研究⁽³⁾とは異なる面が多々あると思われる。例えば数学用語や法律用語などと比べると、格段に口語的表現が多くなることが予想されるが、それは将棋をとりまく環境、すなわち、

- ・小学校入学前の子供から老人まで幅広い年齢層がプレイヤーとして読み、話す。
- ・プロがいて、連盟があり、関係書籍の出版事業に大きく関わっている。
- ・プロの棋譜は観戦記事となって新聞雑誌等に掲載される。
- ・年間を通じて対局と解説のテレビ番組がある。

といった点によるもので、一般語彙との交渉が強く考慮されるのである。一般語と同じ語形のものが気づかれない将棋（解説）用語であることを言うには、ある程度の用例数と特殊な用法の提示が必要となる。

そこで本稿では、まず藤井猛『四間飛車を指しこなす本1』（河出書房新社、2000年、以下「藤1」と略す。）を基準として独特と思われる用語を採集し、そこから以下に述べる数語をピックアップした。藤井の本を選んだのは、著作が多い（『居飛車穴熊撃破 必殺藤井システム』1997年、『四間飛車の急所1～4』、2003-2005年、『相振り飛車を指しこなす本1～4』、2007-2008年など）のでまとまった言語量で調査が可能であること、これらの本で10年間の史的推移も見られること、解説に将棋用語を多く使っていること、などが理由として挙げられる。NHK杯への出場実績も多く、解説としても出演があるので実際の発話が録画等で確認できる点なども研究には好条件である。また、筆者と同じ1970年生まれであり、使用語の分析に世代差を考えなくてよいという面もある。

そして現代のできるだけ新しい事例として、豊島将之『豊島将之の定跡研究』（毎日コミュニケーションズ、2011年、以下「豊」と略す）からも用例を採った。豊島は1990年生まれ。現時点で六段、単著をもつ最年少棋士である。この2冊を基本とし、必要に応じて他本から用例を補充する。

2. 気づかれにくい将棋用語

2-1 ヲ+自動詞

特徴的な用語の一つに、格助詞ヲを自動詞と組み合わせるというのがある。使用例の多い5つの動詞について、それぞれ対応する他動詞との関係も考慮しつつ用例を見てみよう。なお、用例中の▲は先手、△は後手の指し手であることを表す（書籍本文では駒をかたどって五角形）。用例文の末尾には出典の略称とページを示した。

a. 〈寄る—寄せる〉

02. ▲3八玉と玉を寄るのが正解です（藤1-4）
03. この場合は金を寄って受けるのが形です（藤1-245）

一般的には助詞と自動詞・他動詞の関係は「玉が寄る」あるいは「玉を寄せる」となるのだが、棋書においては上のように混淆したような形で現れる。では、ガ+自動詞、ヲ+他動詞を全く使わないかといえばそうではなく、近接箇所にはヲ+他動詞形も使われていた。

04. 玉を早く右に寄せたいところです (藤 1-4)

「寄せ(る)」という言葉は、終盤、玉を詰みに近い状態まで持っていく(指し方の)ことで、上述の「一般語—意味変化あり」型の認知度の高い頻出将棋用語。それ以外に使う紛らわしさを回避しているという、一種の同音衝突のような語彙論的な動きも考えられる。

b. 〈逃げる—逃がす〉

05. 桂を逃げながら〈中略〉▲6六角の好打を見えています (藤 1-16)

06. 取られそうな桂を逃げるのが正解です (藤 1-147)

07. 問題図では飛車をどこに逃げますか (藤 1-222)

08. 3八とで飛車を逃げる手もあるが (豊 190)

09. 答：問題図では飛車より角が働いているので、飛車を逃げる手はありません (藤 1-120)

この動詞の場合には他動詞形「逃がす」の例は出てこず、09を解答とする問題文は次の10のようにガ+自動詞形で表現されていた。

10. 問：飛車が逃げると紛れます (藤 1-119)

「逃がす」は一般に「逃走の意志があるものに対して状況的な手伝いをしてやる」場合に使われ、駒を直接操作する意味が弱いということもあるが、「上部に逃がしてはいけません」など相手玉を捕まえそこなう意でよく用いられるのが「桂を逃がす」のようには使われにくい主な要因であろう⁽⁴⁾。〈ヲ+逃げる〉と似たような表現に次のものがある。

11. 大事な一手は何といっても▲7五角だ。目標の角を避難して△5四歩と突いたのをマイナスにしている。(『飯島流引き角戦法』p.50, 飯島栄治著、2006年)

c. 〈回る—回す〉

12. 攻められそうな筋に前もって飛車を回るのが振り飛車の心得です（藤 1-108）

13. △6二飛と6筋に飛車を回ってきました（藤 1-235）

回るという動詞は、飛車が横に移動する（筋を替える）場合にのみ用いられる。もっとも多い使い方は以下のように「××飛と回る」の形で、『藤 1』には12例あり、用例10のようなガ格は0例。「回す」の例は無く、筆者の経験上聞いたこともない。

14. △6四銀に対して先に▲7八飛と回りました（藤 1-47）

15. ▲7八歩は△6六飛と回られ（藤 1-51）

16. (▲5八飛と) 中央に転回するのが有力です（藤 1-56）

ところで、「回る」に関しては、ほぼ同義の表現で16のような「転回」が1例あったが、これは13や14のように相手の指し手への対処として動く、というのではなく、大きな構想上の転換を漢語で表現したものと考えられる⁽⁵⁾。

d. 〈上がる—上げる〉

17. 後手の角筋を避けて左香を上がります（藤 1-158）

18. ▲5六銀と角道を通したまま銀を上がります（藤 1-235）

これも上のb、c同様、他動詞形は見られない。「上げる」を回避するような理由もa、bのようには想定できない。「銀が上がる」には違和感はないが、実際は「××銀と上がる」が多い。

e. 〈引く—引く〉

自動詞と他動詞が同形のもの。他動詞として問題が無いようにも思えるが、上記a、b、c、dのような例がある以上、自動詞の可能性もある。用例11と21はほぼ同じ状況を述べたものである。

19. 銀を引くのが定跡化された受け方です（藤 1-20）

20. 角を引く手もありそう（藤 1-34）

21. 目標になりそうな角を引き、（藤 1-160）

f. その他

22. そこで銀を出る前に△7五歩と突いてきました (藤 1-130)

23. いつでも飛車を取れる形です (藤 1-26)

24. △7六銀▲8一飛成に△7一步と底歩を受けました (藤 1-165)

「出る」に対応する他動詞は「出す」だが「銀を出す」とは言わず、言うとすれば「銀が出る」⁽⁶⁾。しかし d と同様に用例自体は取れていない。23 は一般でもガ格とヲ格で揺れる形である。24 「底歩を受ける」は、将棋用語でなければ「▲8一飛成ヲ底歩デ受ける」と手段を表すデ格となる。用例は少ないが、このレベルまでヲ格が用いられる点に、将棋用語におけるヲ格の拡張を見るべきであろう。

以上より次のようなことが考えられる：駒の動きに関するものは基本的に自動詞を使う（「飛車が走る」など）。しかし実際は棋士がどれか一つの駒をつかんで操作するため、対象を表すヲ格が強くなることになる。共通語文法的には「飛車を走らせる」「銀を上がらせる」が適格となるが、そうすると全ての駒の動きに「せる／させる」の使役をつけねばならず、本当に使役を使いたいような場面（「8五歩と打って（相手に）飛車を引かせる」など）と紛らわしくなることが考えられる。つまり駒が勝手に動くわけではなく、指し手（棋士）の意志で動かすわけだからヲ格が用いられ、使役形式は相手に応手を強要する場合専用なので自分の駒の動きには使えない。そこで「銀を上がる」型の混淆形が生まれるのである。

2-2 じっと

一般の「じっと」は「じっと見つめる」「じっと我慢する」のように運動しないことを意味する。が、将棋というゲームの性質上、パスは無く、駒をどれか動かさなければならないので、「じっと」と言いながら動きがある点が将棋用語の独特なところである。以下、動きの種類を3つに分けて用例を見ていこう。

a. 単に盤上の駒を動かす場合

25. 次に△6五歩を狙います。8筋を突き捨ててからじっと△6四歩が高等戦術です (藤 1-71)

26. (問：△6五歩と仕掛けてきました。〈中略〉取ってもいいものでしょう

か。) 答: じっと▲4七金と上がり、高美濃を完成させるのが正解です (藤 1-83)

27. △6六歩の取り込みを保留し、じっと△7三桂と 力をためてきました (藤 1-85)

28. (角を切ったりして派手に駒を清算する手順もあるが) じっと▲3五歩と突き、△同歩なら▲3四桂を狙って振り飛車十分です。(藤 1-110)

29. △3八飛成で桂合いを強要し、△3九龍とジツと入る手があったのは幸運だった。(豊 189)

用例 25 は、攻撃の銀が前線まで出ていて、8筋の歩を取ったり駒をぶついたりすることも出来るけれども、銀より後列にある歩を突いて、次の手番で戦いを起こそうとしている様子を表している。もっとも動きの小さい歩兵が、相手の駒と衝突しない範囲で動いたということで、一般語の「じっと」に最も近いものと考えられる。26 と 27 は、駒がぶつかっているけれども「取る」という積極的な動きを起こさず、自陣を整備したり攻撃に参加させる駒を増やしたりする例。28 は歩が一つ動いただけとはいえ、玉頭の歩への攻撃なので穏やかではないのだが、左辺での派手な駒の交換もありえたため、相対的に動きが小さく感じられて「じっと」が用いられた例だと考えられる。29 は△3八飛成と龍になって王手した次の手が、王手でもなく何かの駒を取ったり取ろうとしたりする手でもなく、3九の地点に1マス動いただけということで「じっと」である。カタカナで表記された例が他にないのだが、表記の差に意味があるとすれば、相手玉に迫るといった積極的な動きを表現しようとしたものと言えようか。25～28の例は戦場から離れたところで手を進めるものであった。

b. 駒を取る場合

30. 今度は、△6六歩とじっと取り込んできました (藤 1-192)

31. (△1五歩の端攻めが来たが) じっと▲9一龍と香を取っておき、△1六歩に▲1八歩と受けておくのが冷静な指し方です (藤 1-191)

32. ▲3九金にじっと△1九飛成で先手玉への詰めろは消えたが (豊 198)

用例 30 は持ち駒の飛車を先手陣に打ち込むこともせず、6六歩の取り込みも当たり前になるわけではないので、先手がすぐに対応に追われるような状況ではない。

31 は相手の攻撃を放置して持ち駒をかせぐ例。32 は一度かかった詰めろを先手がふりほどき、それに対し後手が王手をかけたり詰めろを継続したりせず、攻撃のための駒（1九の香車）を補充して先手に手番を渡したという文脈。いずれも、敵への当たりの強い手が考えられる状況で、当たりにならず手を渡すという共通点がある。

c. 持ち駒を打つ場合

33. じっと△7四歩と 控えて 打つのが好手です（藤 1-71）

34. △8六歩に代えて、今度は△2二角とじっと打ってきました（藤 1-147）

35. ▲4五桂には△2四桂とじっと打つ手があり、△3六桂や、△1五歩の端攻めが心配です（藤 1-88）

36. じっと△6八歩と打たれ後手玉に詰めろが続かず先手負けだ（豊 50）

持ち駒はどこへでも打てるので、直接相手の駒に攻撃的に当てることも出来る。が、33～35はいずれも後手は2段目から4段目、すなわち自陣近くに打っている。33は7五で浮いている銀を支えるための歩打ちなので攻撃的な手ではなく、用例26に近い。しかし34も35も先手が放置すれば次の一手でいきなり先手を不利に陥れるような攻撃的な手である。36も飛車を切るという筋があるところで王手でもなんでもない歩を打つので「じっと」なのだが、これも実は先手玉の逃げ場をつぶす攻撃的な手である。

以上25～36の例を見るに、8割以上が攻撃に繋がる手であった。まとめると、「じっと」指す手そのものは、相手の仕掛けた攻撃に正面から対処したり、相手の駒を直接取りに行ったりという激しいものではないが、近い将来（1手先、2手先）において激しい攻撃計画をもつ、主に攻撃準備的な手である。豊島の「じっと」は終盤、相手陣地内での動きに用いられている点が藤井とは大きく異なる。用法が変化しつつあるのかもしれない。

ここで世代差を検討する資料として『棒銀の闘い』（加藤一二三著、大泉書店、1968年）を見てみると、「じっと」は本文に2例だけある。

37. 将棋の戦いでは、派手に駒と駒とがぶつかり合ったときの応酬も大切だが、同時に戦いのないときに陣容を整え、じっとチャンスを待つ辛抱も必要な

のだ (p.62)

38. 後手は〈中略〉△7六歩と取り▲同銀に△7四歩とじっと打っているのが巧い手。△7四歩は渋い好手で、こんな手が自然に指せるようなら棒銀戦法は卒業といえる。〈中略〉次に△6六飛のねらい。〈中略〉受けるには▲6七金だが、すると△7五歩の銀取り (p.214)
39. 上手も1四歩から1二香とじっとしんぼうします(『よくわかる駒落ち』(花村元司著、東京書店、1970年、復刻版 p.40)

用例37は将棋の一般戦術論、38は25と非常によく似た状況(手筋)である。39は攻撃色のほとんど無い手待ち。やはり本来の「じっと」は駒の衝突の一步手前で機を窺うようなものだったが、徐々に攻撃色を強めてきたと考えられる。

2-3 嫌味

40. △2二角など嫌味な手が残っており(藤 1-14)
41. ▲8一飛成は△6六角と打たれるのが嫌味です(藤 1-141)
42. ▲5七歩と上で受けると、△7六馬が嫌味です(藤 1-263)
43. △8八角成▲同玉△5六飛が少し嫌みだ(豊 20)
44. ▲3六歩で3筋の嫌みを解消し先手指せる(豊 64)
45. △7五歩は手筋で嫌みな一着(豊 146)

現代標準語の「嫌味(イヤミ)」は「相手に不愉快な気持ちをおこさせること・言動」といった意味だが、将棋用語の嫌味は、「気にかかる嫌なもの。自分に有利な進行を妨げるような相手の一着」くらいの意味で、現代語のように屈折した心持で嫌がらせをしようとするものではない。用例から見えるのは自分の指し手の「弱み」と似たような意味であり、40～44は明らかに未然に気付いている(実現していない)悪い変化の可能性である。強み・弱み・楽しみ・といった語からの類推で、「嫌だ」という形容動詞に接尾辞「み」を付けて「いやみ」=いやな点、としたものと考えられる。

2-4 ぴったり

まずは専門用語的にもっとも変形したものから見てみよう。

46. △4七成銀は▲4九金がピッタリ。(豊 66)

「ぴったり」は一般にスキマやズレなどが無いさま・よくつり合うさまなどを意味し、「キッチンの際間にピッタリはまるワゴン」「彼女には彼がピッタリだ」のように使うが、46 はどのように解すればよいか。一般語の用法とほとんど同じ47の例から考えてみよう。

47. (問：持ち駒はありません〈中略〉7手詰です。答：▲2六歩△3五玉▲4五金△2六玉▲2七銀△2五玉▲1七桂) ▲2六歩と突けば解答図までぴったりの詰みです (藤 1-257)

持ち駒は無く、盤上で自玉を守っていた歩・銀などを総動員して相手玉を追い詰め、最後2五の位置から一歩も動けなくなったところで、2マスにしか利かない桂馬が跳ねてちょうど王手になる、という意味で「ぴったり」なのだろう。そうすると、敵の動きに対するこちらの対処が、駒の性質を存分に活かして無駄が無い、というのが将棋の場合の「ぴったり」だと考えられる。以下、48から52のように配列することで、本来存在した説明的な要素が徐々に省略されていくさまが分かるだろう。

48. △4二金は最善の頑張りだが、
▲4五桂がぴったりで△同銀には▲6三馬がある (豊 132)
49. ▲6五桂には△同馬がピッタリとなる (豊 207)
50. △8六歩には▲8二飛がぴったりで先手優勢 (豊 138)
51. △2九飛成で△2七飛成は有力だが、▲5五角がピッタリで先手を持ちたい (豊 102、図1)
52. △5六飛は▲3八桂がぴったりだ (豊 37)

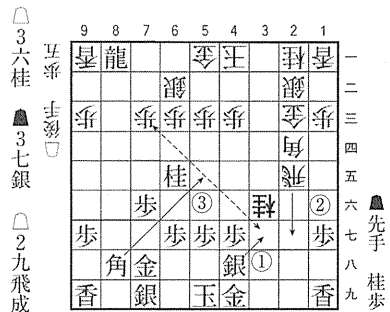


図1 用例51の局面

そして用法的には、50～52は相手からの攻撃を飛車や角や桂で受けて、その1手が別の角度への利きで同時に攻撃にも利いてくるという「ぴったり」の典型(図1は、先手の3七銀を狙って後手の5段目の飛車が動いたら(②)、それによって先手の角が5五に進出でき(③)、3七の銀を守りつつ6五の桂馬と連携して

7三を攻撃できる形になる例)なのだが、46、49あたりはそれほどのコストパフォーマンスは無い⁽⁷⁾。常套句になって条件がゆるくなる一例で、これも世代差の検討対象となろう。前掲の加藤の本(1968年)には1例だけで、「(△3五歩で先手の2五の)銀の逃げ場がなくピッタリ決まっている」(p.27)と一般語的な連用修飾の例である。先手銀の真横に歩を突くことによって斜め後への退路を封じ、同時に8四の飛車の横引きを通して銀の前方への進路を塞ぐという一石二鳥の手ということで、やはり駒の利きが一瞬でダイナミックに作用するものであった。

2-5 決める

この例も、前節2-4「ぴったり」と同じように、採集した用例の中に説明的要素が省略される前の姿を認めることが出来る。

53. ▲6三歩成を決めず、単に▲8五桂と跳ねたのが問題図です(藤1-30)

54. △2二銀▲1二馬を決めれば安全度がまるで違います(藤1-42)

55. △1六桂▲1八玉を決めてから△3九角が手筋です(藤1-189)

最初の2-1「ヲ+自動詞」型と違って、「ヲ+決める(他動詞)」自体はおかしくない。ただ一般に「▲6三歩成を決め」るといえば「▲6三歩成という技を決めること」を意味し、実際に棋書でも〈決める—決まる〉の他動詞と自動詞はそのようにも使われている。

56. 次に△6四歩と打たれては一大事です。一気に決める手段を3手示して下さい(藤1-93)

57. ▲4二角成△同金▲7七桂と決めに行くのも、△8一飛▲6五桂△6四銀で振り飛車が大変です(藤1-110)

58. △6三同銀は▲7三桂成で決まります(藤1-93)

59. △9九角成なら▲7三桂成が決まります(藤1-97)

60. 攻めが決まる(豊30)

こうしてみると、やはり53～55の「手順+ヲ+決める」の形と56～60の「勝負を決める」・「攻撃が決まる」の形とは明確に使い分けられていることが分かる。後者は共通語、前者が位相語ということになる。

この位相語の成立については、次のように「形を決める」が並行して使われて

いるので、頻用されるうちに、手順を示した場合には自明である「形」という語が省かれていったという経緯が推測できる。

61. △6 四銀が形の決めすぎなのです (藤 1-130)

62. 先手は形を決めていないので、第3図から穴熊を目指していくことができる (豊 7)

63. △1 八角成から決めるだけ決めて△4 三銀と戻したが (豊 214)

用例 63 は 55 と近いが、「形を決める」という句の意味を文字通りに考えるだけでは理解しづらい。「(形を) 決める」とは、61、62 から読み取れるネガティブな面も含んで“様々な応酬のバリエーションが想定されるような局面で、展開を限定する、後の選択肢を狭めるような一手を指して、後戻りできない形にする”というような意味に解すればよいのではないか⁽⁸⁾。

まとめ

- ①「銀を上がる」型の〈ヲ+自動詞〉は、自動詞・他動詞・使役表現の役割分担に対象格の操作感が作用して成立した、一種の混淆形である。
- ②「じっと」という状態副詞は将棋の性質上、必ず動きを伴って用いられる。駒がぶつかりあっているような一見して激しい部分に手をつけず、自陣の歩を突いて次の手番で攻撃できるように力をためるような手を指す場合の形容がもともとだが、龍が敵陣で香を取るような手でも用いられるようになってきており、意味の拡張が見られる。
- ③「嫌味」は共通語と同形で意味が異なるものだが、共通語からの意味変化ではなく、他の「-み」形からの類推で成立したと考えられる。
- ④「ぴったり」と「決める」は一般語を使用しているうちに自明の要素が省略されるようになり、位相語化した例である。

以上、いくつかの具体例から、対局という独特の世界に合わせて一般語彙が意味・用法の変化を起こして専門用語化していく様を明らかにした。

今回は現代の棋書のみを用いた調査であったが、項目がある程度そろったら将棋道場などで聞き取り (アンケート) を行うようなことも必要であろう。将棋自

体は平安時代からあるもので、詰将棋などの棋書は江戸時代以降、確かなものが残っている。つまり文献による史的研究が可能なのであって、駒の字体の問題なども含めて日本語研究との接点は小さくないと考えている。

【注】

- 1 「高飛車」の比喩的な用法は江戸時代からあるが、「浮き飛車」を表す将棋用語としての使用例は確認できていないため、本稿では「王手」等と同じ位置づけにしない。
- 2 佐藤祐子 2003「「気づかない方言」の意味論的考察—仙台市における程度副詞的な「イキナリ」—」『国語学』53、篠崎晃一・毎日新聞社 2008「出身地がわかる！気づかない方言」など。
- 3 田中章夫『日本語の位相と位相差』は、社会的位相差をもたすものとして、性別、世代、身分・階層（貴族・武士など）、職業・専門分野（学術語・軍隊・遊里など）、社会集団（学校ことば、六方ことばなど）を挙げている（p.9）。将棋は「専門分野」か「社会集団」。
- 4 ただし 2011 年 12 月 11 日放送の第 61 回 NHK 杯テレビ将棋トーナメント（郷田真隆九段と広瀬章人七段の対戦）において、解説の鈴木大介八段が「(△3 三桂は自陣の) 桂馬を逃がし」として、いつか飛車角総交換みたいな手を狙ってますね。うん、次△2 五桂と逃がすんでしょね」(35 分経過頃)と発言した例がある。
- 5 もともと四間飛車で6八に振った飛車が、受けの過程で7八に回っていたが、駒組みが進んで3七桂型の高美濃囲いに組めたので5筋に回って中央突破を目指すという文脈。同様の「転回」の例が『棒銀の闘い』p.54にもある：「△7六飛と取るのなら、〈中略：先手2八からの〉8八飛の素晴らしい転回で見事に決まる」。2筋以上動かす場合に用いるか。「回る」は1筋でも2筋以上でも用例がある。aの「寄る」は隣に1マス動く場合にのみ用いられ、飛車の使用例もある（「△3八飛と寄るのも当然」『飯島流引き角戦法』p.42）。
- 6 この「出る」に関しては複合語で用いられることが多い：
 64. 突き捨ててからの銀出がスピードを速める手筋です（藤 1-220）
 65. この銀出のタイミング（藤 1-241）
 66. この角出が9八香型を生かした一着です（藤 1-67）
 角に関しては「△6四角の飛び出しがない」（豊 25）というもある。
- 7 図2の▲4九金打が用例46の「ピットリ」なのだが、他の用例に見られるような駒の性質を最大限に利用するような面はなく、「危なげなく受かっている」程度の意味で用いられたと考えられる。



図2 用例46の局面



図3 用例63の局面

- 8 図3（豊島本より転載）は▲1八飛までの局面。△2七角の悪手に▲3五歩の好手を返されてしまった状況への対処が用例63である。中終盤の攻撃態勢作りに大駒をどう配するか、選択の幅はあったが、△1八角成と飛車を取って2七の角を解消し、△3八飛とすぐに打ち下ろして▲4八歩と打たせ、右辺の攻防の形を一つ選んで決めてしまった、という意味と筆者は解した。この種の言葉の意味の説明は、棋力の無さによる誤解がありえ、専門用語研究の難所と言える。

【参考文献】

- 『日本将棋用語事典』【監修】原田泰夫、【編集委員】森内俊之・佐藤康光・島朗・池畑成功・荒木一郎、【編集協力】中原誠・米長邦雄・羽生善治、【プロデュース】荒木一郎、東京堂出版、2004年
- 『読む将棋百科』羽生善治著、河出書房新社、2009年
- 『日本語の位相と位相差』田中章夫著、明治書院、1999年
- 「「気づかない～」という術語について―新語研究の立場から―」橋本行洋、『日本語の研究』1-4、2005年
- 「数学における動詞「おく」の意味・用法―「気づかない」専門日本語語彙の研究にむけて(2)」佐藤宏孝・花蘭悟、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36号、2010年
- 「数学における動詞「得る」の意味・用法―「気づかない」専門日本語語彙(3)」佐藤宏孝・花蘭悟、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』37号、2011年